

地域におけるメディア・デザイン実践 「美唄 50 音かるた」の試み

宮田雅子

地域において、デザインはどのような役割を果たし得るだろうか。本稿では、まず、札幌大谷大学と美唄市との連携事業「美唄サテライト・キャンパス」の一環として筆者が中心となって実施したメディア・デザイン実践「美唄 50 音かるた」について報告する。次に、実践の内容を振り返りながら、それが地域とデザインの関係においてどのような意義があると言えるのかを述べ、今後の課題について整理する。

1. メディア・デザイン実践「美唄 50 音かるた」

1-1. 実施の概要

2012 年度、札幌大谷大学と美唄市との協働により、地域のかるたを制作するメディア・デザイン実践「美唄 50 音かるた」を実施した。実践内容は、二段構えの構成である。まず前半の日程でワークショップをおこない、参加者が美唄市内で撮影した写真に文章をつけて、美唄のかるたを協働して制作する。後半の日程では、そのかるたを使って美唄市内でかるた大会を実施する。前半のワークショップは北海道中央コンピュータ・カレッジ(美唄市)で 2012 年 8 月 9 日(木)、10 日(金)に、後半のかるた大会は 8 月 25 日(土)にアルテピアッツァ美唄でおこなった。

前半のワークショップの参加者は、18 名。内訳は、札幌大谷大学芸術学部および短期大学部の学生 8 名、札幌大谷大学の教員 2 名、美唄尚栄高校の生徒 3 名、同高校教員 1 名、美唄市在住の一般参加者 4 名である。加えて、ワークショップの進行役である筆者と、美唄サテライト・キャンパス運営協議会から数名がファシリテーターとして参加した。約 2 週間後のかるた大会にはワークショップの参加者を中心とした約 25 名が集まり、制作した「美唄 50 音かるた」を使ってかるたのゲームをおこなった。

1-2. ワークショップのプログラム

実践の前半部分にあたるワークショップは、2 日間のプログラムである。次のような段取りで実施した。

①主旨の説明、グループわけ

1 日目の冒頭、まずワークショップの目的について説明する。ここでとくに参加者に伝えたのは、「日常の目線で美唄の魅力を発見し、共有しよう」という主旨である。すでに全国各地には「ご当地かるた」と呼ばれるような、地域の名産品や観光名所などを紹介する地域かるた²が多数存在し、地域の PR 活動などにも役立てられている。一方で、このワークショップで目指すのは「日常の目線」で集められた美唄のイメージである。〈誰かが〉良いと決めた美唄のイメージではなく、〈私が〉良いと感じた美唄のイメージを集めてかるたをつくることで、そのイメージを皆が共有することが、この実践の意図である。筆者が事前に美唄市内で撮影した写真を紹介しつつ、その後のグループワークで各自が市内に出て良いと感じた「印象的な風景」「道ばたで見つけた気になるもの」「たまたま出会った親切な人」などの写真を集めてくるというミッションを説明した。最後に、くじ引きによって参加者は 4 つのグループにわかれた。

②グループにわかれてのディスカッション

グループごとにテーブルをかこみ、写真撮影に出かける場所を検討する。札幌市からの参加者の中には美唄市内の土地勘があまりない者もいるため、あらかじめ 6 つのルートを用意した。各グループには、その中から行きたい場所を選んでもらう(図表 1)。写真撮影に出かける機会は 1 日目の午後と 2 日目の午前の 2 回がある。グループごとに話し合っ行って行き先を 2 つずつ決めてもらった。

③かるたの素材集め：写真撮影

行き先が決まったグループから、写真撮影に出発する。移動には車を使う。グループごとに決めたルートをたどりながら、気になるものなどがあったところで車を降りて歩いたり、写真を撮ったりするというかたちで、参加者の興味や偶然のできごとになるべくフレキシブルに対応できるファシリテーションを心がけた。参加者は、各自 1 台ずつ自前のデジカメを持参しており、それぞれ気になったものの写真を撮ってくる。1 日目は約 3 時間、

図表 1：写真撮影のためのルート

	エリア名	行き先	おもな見どころ
1	中心部エリア	美唄駅周辺	美唄駅周辺を徒歩で移動しながら撮影
2	東部深奥エリア	盤の沢町, 我路町, 東美唄町方面	浄水場, 美唄川, 我路ファミリー公園, 炭鉱遺産群, 美唄ダム など
3	東部丘陵エリア	東明町, 落合町方面	東明公園, ゆ〜りん館, サン・スポーツランド, サイクリングロード, アルテピアッツァ美唄 など
4	西部エリア	西美唄, 上美唄方面	宮島沼, 水田風景, 畑作風景 など
5	南部エリア	進徳, 光珠内, 峰延方面	アンテナショップ, 林業試験場, 光珠内調整池, 恵風園 など
6	北部エリア	茶志内町方面	直線道路(国道12号線), 空知団地, ハイテクセンター, アスパラ畑, スカイポート美唄 など

2日目は朝から4時間弱の素材集めの時間を設けたところ、全員で1,500枚弱の写真がかかるたの素材として撮影された(写真1)。

写真1：かかるたの素材のための写真撮影



被写体は、市内の美しい風景だけでなく、道ばたのマンホールや街灯、用水路など、普段は目に入っていないあまり気に留めないようなものや、道中に出会った人々とのやり取りがうかがえるもの、グループメンバーを撮ったものなど、多様である。撮影から戻ったグループに聞いたところでは、たまねぎ畑で農作業中の方や、庭に自作の風車を制作し設置している方、自宅で羊を飼っている方と出会ったり、市内中心部で開催中だった縁日、農産物即売会などのイベントをのぞいたりするなど、もの珍しいさまざまなできごとがあったようだ。

④かかるた台紙の作成：読み文記入

撮影した写真を会場内でプリントアウトし、かかるたの台紙の上半分のスペースに貼りつける。台紙の下半分には、かかるたの読み文と撮影者名、撮影場所を記入する欄があり、写真と文章を組みあわせることでかかるたの台紙が完成する。完成した台紙は、あいうえお順に会場の壁に貼り、一覧できるようにした。

50音のかるた一式を制作し、実際にゲームに使うためには、たとえば「あ」の札が複数枚あったり、「を」の札がなかったり、というのは好ましくない。そこで、まずは思いついた読み文を写真が貼られた台紙に書き込んだものを、あいうえお順のスペースに枚数を問わず貼っていき、最後に投票で「あ」の札の候補の中から採用品を1点、「い」の札の候補の中から1点…、というように選んでかかるた一式を完成させることにした。参加者にもあらかじめそのことを伝えてあるため、なるべく候補作の少ない文字からはじまる読み文をつける方が採用される可能性が高いのではないかと考えたり、隣のグループが書いている読み文を見て異なる文字からはじまる文章を考えたりと、ささやかな駆け引きも見られた(写真2)。

⑤投票と50音かかるた完成

50音すべてのかかるた台紙がそろったところで、参加者全員でひとつおりの作品を見る時間を設けた。その後、複数の候補作がある文字の中から、各文字1点ずつの採用品を決めていく。投票をおこなう予定だったが、時間の都合を考えて多数決に変更した。

複数枚の候補作がある札の選び方は、こうである。たとえば候補作が4点あった「こ」の札の場合、まず4人の

写真2：かるた台紙に写真を貼り、読み文を記入



作者からそれぞれ写真を撮ったシチュエーションと読み文についての説明をしてもらい、それを聞いたうえで全員が挙手をして多数決で採用作品を決める。候補作が1点だけの札は、多数決をおこなわず、その作品を採用とする、という案配である。こうして「あ」から順番に採用作品を決めていき、「ん」までの46点の写真と読み文³を決定したところで、ワークショップのプログラムは終了した(写真3、4)。

写真3：候補作の中から採用作品を選んでかるた完成



1-3. かるた大会

ワークショップの中で採用された作品は、台紙に貼りつけた写真と手書きの文章のみの状態である。これを約2週間後のかるた大会に向けて再度プリントアウトし、スチレンボードに貼りつけて、大会用のかるたを制作した。通常、市販されているかるたのサイズは、文字札も絵札も60×80mm前後のものが多いが、この実践では絵札(写真の札)の方を通常よりも大判のA4サイズ(210×297mm)で制作した(写真5)。その理由は2つある。第一に、かるた大会の会場であるアルテピアッツァ美唄アートスペースの広い空間の中で、見映えがすること。第二に、身体を大きく動かして札を取ることで、室内の遊びであるかるたを、よりダイナミックな遊びにすることができる考えたためである。

かるた大会当日にはワークショップに参加していない方々も集まったため、最初に少しワークショップの内容や意図を説明してから、かるたのゲームを2回おこなった。絵札が大きいのでテーブルなどは使わず、直接床に置き、それを参加者が取り囲むかたちである。ルールは普通のかると同じで、文字札の文章が読みあげられたところで、それに合った絵札を参加者が取り、獲得した枚数を競う。1回戦目は美唄市内の専門学校生が13枚の札を取って優勝し、2回戦目は札幌大谷大学の学生が同じく13枚の札を取って優勝した(写真6)。

1-4. 参加者およびファシリテーターからの感想

一連の実践の終了後、参加した学生やファシリテーターとして参加してくださった美唄サテライト・キャンパス運営協議会の方々に感想を聞いた。いくつか挙げると、「美唄にははじめて来たが、きれいな場所が多くて楽しかった。(学生)」「たまたま出会った人に話しかけたら、とても親切にしてもらえて嬉しかった。(学生)」「人によっ

写真4：採用された作品



写真5：かるた大会用の大判かるたの制作



写真6：かるた大会の様子



で写真の撮り方が違うことがわかった。美術を専門にしている人は視覚的に美しい写真を目指してしまうが、写真には『その瞬間の自分の気持ちを視覚化する』という側面もあるのだと気づいた。(学生)「日頃着目しないものが被写体になっていることが新鮮だった。(運営側)」市内の有名な観光地を紹介することは異なる美唄の姿が描かれたと思う。(運営側)「みんなで共有する、というところに共感した。(運営側)」リーフレットや台紙に繰り返し使われたロゴマークがあったことで、一連の実践に視覚的な統一感を感じた。(運営側)」などであった。

2. 一連の実践のふり返り

さて、ここまで細部にわたりメディア・デザイン実践「美唄 50 音かるた」の内容を紹介してきた。この節では、この一連の実践の成果についてふり返りたい。こうした実践は、その場を共有した者同士にとっては思い出深い経験となって記憶に残るが、残念ながらその場に居あわせなければ、その経験を共有することは難しい。そのうえ、1人1人の個人的な経験の総体としてのワークショップの成果を描くこともまた困難である。そこで本項では、参加者のワークショップで制作した成果物の分析を試みることで、当初考えていた意図がどのように達成されたのかを検討したい。

2-1. 参加者の表現内容による作品の分類

参加者が46点のかかるた台紙に表現した内容を筆者なりに分類したところでは、表現の主題として次の6つがあげられる。

- a：発見したもの・こと(身近なものへの興味)
- b：美しい景色・美しいもの(美的なものへの感動)
- c：出会った人とのやり取り
- d：美唄の名物・名産・イベントなど
- e：グループメンバー(ともに活動した仲間への意識)
- f：美唄の歴史、時間の長さに対する感嘆

まず46点の作品がどのような主題で表現されたものかを分類する(図表2)。次に、全作品の中に、この6種類の主題がそれぞれ何回ずつ出てくるのかを数える(図表3)。ただし、1点の作品の中に2つの主題を読み取れるものが14点あった。それらをどちらかひとつの主題に絞って分類することは適切ではないと考え、図表3では2つの主題が含まれるものはそのまま2回重複して数えた。

図表2：参加者が表現した内容と主題による分類

札	読み札の文章	写真の内容	主題1	主題2 (2つ主題があるもののみ)	作者	
					市内	市外
あ	足元に 美唄の象徴 描かれる	「Bibai」の文字が入った鮮やかな青のマンホールのふた	a 発見したもの・こと			○
い	行きたいが マガンもガマン 9月まで	宮島沼の表示板「マガンの飛来数〇羽」の「〇」の欄に、「渡ってしまいました」と手書きされている	a 発見したもの・こと		○ ※	○ ※
う	美しい 景色をずっと 残したい	東明で撮影されたすすきと青空の景色	b 美しい景色・美しいもの		○	
え	エコ! ロハス!! 木片チップの 雪山だ	茶志内で撮影された木片チップの山	a 発見したもの・こと			○
お	おっちゃんの たまねぎサークル いい調子	たまねぎ畑で見た円形状のトラクターの車輪跡と、たまねぎを育てる農家の人らしき後ろ姿	a 発見したもの・こと	c 出会った人とのやり取り		○
か	帰り道 遠い夏の日 また、明日。	グループワークのメンバーが夏の夕日を浴びて歩いていく後ろ姿	e グループメンバー			○
き	綺麗でしょ? それでも私は 肥料なの!	肥料用に栽培されているひまわり畑の様子	a 発見したもの・こと	b 美しい景色・美しいもの		○
く	くつろぎ中 おじさん片手に スマートフォン	アルテピアッツァ美唄の芝生のベンチに靴をぬいで座りくつろぐ年配の男性の手にスマートフォン	a 発見したもの・こと			○
け	けむしさん くねくねしながら どこ行くの?	地面を這う虫の幼虫	a 発見したもの・こと			○
こ	今夜は やきとりつまんで一杯か	美唄やきとり	d 美唄の名物・名産			○

さ	さびてても 心はさびない 恋心	道ばたに捨て置かれた農具らしいもの の車輪が錆びてできた穴がハート 型に見えることから、手をつないだ 男女の影の写真を重ねて撮影	a	発見したもの・こ と			○
し	車窓から 見えた満開 花 風車	グループワーク中に出会った地元の方 が工作してつくったカラフルな ペットボトルの風車	a	発見したもの・こ と	c	出会った人とのや り取り	○
す	水面に 違う世界が また ひとつ	東明公園の水面に映る風景	b	美しい景色・美し いもの			○
せ	背に受ける 夕陽に思う ヤマの一日	炭鉱跡に残された縦杭槽(やぐら)が 逆行の夕日にシルエットとして浮か び上がる景色	b	美しい景色・美し いもの	f	美唄の歴史、時間 の長さ	○
そ	空を舞う まがりはガラス の 中にある	美唄駅前の街灯を飾る青いマガンの スタンドグラス	a	発見したもの・こ と			○
た	七夕に 私の願い 叶える か	民家の庭の植木につり下げられたカ ラフルなひょうたんの飾り	a	発見したもの・こ と	b	美しい景色・美し いもの	○
ち	ちっぴけな ステージだけ ど 宴の場	中央公園に設えられたステージ	a	発見したもの・こ と			○
つ	ツタのはう 郵便局は 半 世紀	我路郵便局のレンガの壁を這う 蔦状 の植物	a	発見したもの・こ と	f	美唄の歴史、時間 の長さ	○
て	手をつなぐ メタセコイア の 大樹たち	アルテピアッツァ美唄のメタセコイ ア(スギ科の針葉樹,別名アケボノス ギ)を見上げた様子	b	美しい景色・美し いもの	a	発見したもの・こ と	○
と	どこまでも ひろがるソバ の 白い花	東明のソバ畑が広がる様子(遠景)	b	美しい景色・美し いもの			○
な	夏の午後 日差しを浴びて 休憩中	アルテピアッツァ美唄の駐車場にあ る車止めの白い石	a	発見したもの・こ と			○
に	肉食の 僕も大好き とう もろこし	とうもろこしを食べるメンバーの様 子	e	グループメンバー	d	美唄の名物・名産	○
ぬ	沼のそば 鳥を見守る 夏 の花	宮島沼で見た紫色の花を咲かせた植 物(接写)	b	美しい景色・美し いもの			○
ね	ねえ見てよ たくさんの木 が ささえてる	藤棚らしきところに緑の葉が重なっ ている様子	b	美しい景色・美し いもの			○
の	のぼる先 見えた世界は 時代劇	東明公園の高台から見た風景	b	美しい景色・美し いもの	a	発見したもの・こ と	○
は	はにかんだ まわる美唄の 発明家	市内で出会った方(屋外に手づくり の水車や風車などを制作している)	c	出会った人とのや り取り			○
ひ	ひしの実を 美唄の忍者が ばらまいた!	天日に干しているひしの実が、忍者 の道具「まきびし」に似ている様子	a	発見したもの・こ と			○
ふ	ブウウーン キィィィイ ーン ガー~~~~!	農道離着陸場の滑走路に立つメン バーの後ろ姿	a	発見したもの・こ と			○
へ	平和を守る 地産戦隊 ビ バレンジャー	歌舞裸まつりのステージの様子	d	美唄の名物・名産			○
ほ	募金箱 アルテピアッツァ 守るため	アルテピアッツァ美唄内に置かれた 募金箱	a	発見したもの・こ と			○
ま	マミィちゃん びばいダムの ナイスガイ☆	「びばいダム」の文字が読めるマン ホールのフタ	a	発見したもの・こ と			○
み	水面から 夏の宝石 すく いあげ	市内で開催中だった「わくわくまつ り」の出店のひとつ「トマトすくい」 のトマトのアップ	a	発見したもの・こ と	b	美しい景色・美し いもの	○
む	麦食べる 育つ子羊 「エ サうめえ〜」	西美唄で出会った方が飼っている羊 のエサやりの様子	c	出会った人とのや り取り	a	発見したもの・こ と	○
め	「めげないで！」 美唄で戦 う 男達	グループワーク中、車に戻るグルー プメンバーの後ろ姿	e	グループメンバー			○
も	もういいかい? のぞいた 頭の 子どもたち	グループワーク中に出会ったたまね ぎ農家の方の作業の様子と、収穫前 のたまねぎ	c	出会った人とのや り取り	a	発見したもの・こ と	○

や	やきとりか とりめしにし よか どっちもか	宮島沼から会場に戻ろうとするグ ループメンバーの1人	e	グループメンバー	d	美唄の名物・名産	○	
ゆ	ゆっくりと 時間が進む 線路の雲	峰延駅から見た青空と雲の様子	b	美しい景色・美 しいもの			○	
よ	用水路 光輝く ところて ん	用水路に勢いよく流れる水がとこ ろてんのように光っている	a	発見したもの・こ と				○
ら	らんらんと 太陽輝く 蟹 気楼	グループワーク中、遠くの路上に見 える蟹気楼	a	発見したもの・こ と			○	
り	リサイクル 駅の姿が み ちがえる	白と赤の鮮やかなペンキで塗られた 東明駅の駅舎	a	発見したもの・こ と				○
る	留守番中 誰か遊びに 来 ないかな	ワークショップ会場近くの飲食店の 店頭、あひるの置物が外をのぞく ような配置で置かれている	a	発見したもの・こ と				○
れ	レストラン 松の木の下の エビフライ	アルテピアッツァ美唄の地面で拾っ た松かさ、地面に6本並べて撮影	a	発見したもの・こ と				○
ろ	ロボたんの 眼差し光る 交差点	西美唄の交差点に設置された交通安 全のキャラクターに、「見てるよロボ たん」と書かれている	a	発見したもの・こ と				○
わ	ワイルドな ふたが田んぼ を守ります	上美唄排水機場のタンクのようなも のが、金属のプタのように見える	a	発見したもの・こ と			○	
を	をっつと はじけるトマ トの 赤い汁	グループワーク中に出会った方から いただいたトマトにかぶりつくグ ループメンバー	e	グループメンバー	c	出会った人とのや り取り		○
ん	ん！ これは 石じゃない よね 羊のフン	地面に落ちている羊のフン	a	発見したもの・こ と			○	

※「い」の札は、市内在住者と市外在住者の連名による作品。

図表3：参加者が表現した主題ごとののべ枚数

	主 題	作者が市内在住	作者が市外在住	合計
a	発見したもの・こと(身近なものへの興味)	9 作品	23 作品	32 作品 ※
b	美しい景色・美しいもの(美的なものへの感動)	6 作品	6 作品	12 作品
c	出会った人とのやり取り	0 作品	6 作品	6 作品
d	美唄の名物・名産・イベントなど	4 作品	0 作品	4 作品
e	グループメンバー(ともに活動した仲間への意識)	3 作品	2 作品	5 作品
f	美唄の歴史、時間の長さに対する感嘆	0 作品	2 作品	2 作品

※「い」の札は、市内在住者と市外在住者の連名の作品だったため、市内・市外にそれぞれ1回ずつ、計2回カウントしている。

図表3は筆者の判断により分類した恣意的なもので、読み取り方は人によって多少振れ幅があるに違いないが、それを差し引いても「a：発見したもの・こと」を主題とした写真および文章表現が圧倒的に多いとあって、差し支えないのではなかろうか。美唄市内には美しい景色を見られる場所が多数あるにもかかわらず、「b：美しい景色・美しいもの」よりも「a：発見したもの・こと」を主題として表現された作品が多く、完成したかるた全体の半分以上を占めているわけである。撮影された素材写真だけを見た印象では風景を撮ったものも多いのだが、かるたを制作する(=他者に見せる)段階で、風景写真よりもみずからの発見を伝える写真の方が選ばれているようである。これは、ワークショップを企画した筆者にとっても少々意外だった。従来ある名産品や観光名所を紹介するような地域かるたとはひと味違うものをつくらうという意図を説明してはあったが、それでも「地域の写真=きれいな風景」といったステレオタイプなイメージが中心になるのではないかと予想していたのである。良い意味で予想が裏切られたのだが、その理由を考えてみると、ひとつにはワークショップ冒頭での説明を参加者がよく理解してくれていたことももちろんある。それに加えて、日頃、携帯電話で写真を撮ることや、Twitter や facebook などのソーシャルメディアに親しんでいることで、ちょっとした発見を写真に収めるような習慣的な身体行為が、もともと参加者の方にあったのではないかと考えられる。

2-2. 主題と表現

前項では、ワークショップで制作された全46点の作品を、6つの主題に分類した。その中からいくつかについて、もう少し内容を詳細に見てみたい。まず、もっとも数の多かった区分「a：発見したもの・こと」を主題として表現された作品を見てみよう(写真7～11)。



写真7：「【お】おっちゃんのたまねぎサークル いい調子」
 たまねぎ畑を耕したトラクターの車輪の跡が円形に残されている様子のおもしろさを、「たまねぎサークル」と表現している。また、土の表面の痕跡だけでなく、その作業をした人物の後ろ姿と影を画面に入れ、読み文に「いい調子」と表現することで、これが人の手による作業の痕跡であることへの親しみや、作業が順調に進んでいるのではないかとという作者なりの解釈があらわされている。

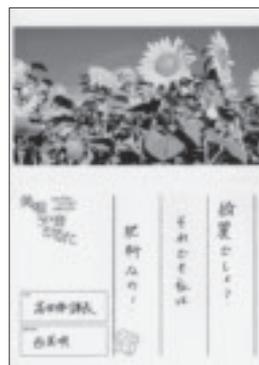


写真8：「【き】綺麗でしょ？それでも私は肥料なの！」
 美しく咲いているひまわりだが、鑑賞用に売られるのではなく肥料にするためのひまわりだと教わり、その驚きをきっかけとして制作されている。ひまわりを擬人化し、1人称の「私」として文章を書いたことで、こんなに美しい花が肥料になってしまうことをもったいないと感じた作者の心情と、しかし健気に咲いているひまわりのたくましさとがユーモラスに表現されている。



写真9：「【つ】ツタのはう郵便局は 半世紀」
 1930年に建てられたレンガづくりの建物である我路郵便局は、現在もまだ簡易郵便局として使用されている。その時間の長さ(「半世紀」と表現されているが、実際には80年以上)に思いをはせる作者の心情が文章にあらわれている。かつ、ただ古めかしいという受け止め方ではなく、壁面に見られる青々とした蔦の生命力との対比的な写真が使用されている。

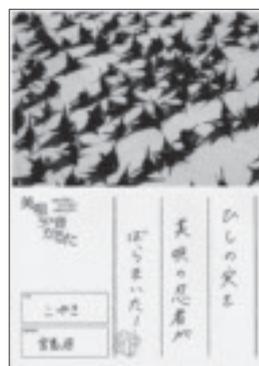


写真10：「【ひ】ひしの実を 美唄の忍者が ばらまいた！」
 沼から取ったヒシの実を、板の上に並べて乾燥させている様子を写真に収めた。写真からは、並んだヒシの実とその影の形状が描く視覚的なリズム感が感じられる。「撒菱(まきびし)」とは忍者が逃げる時に用いる道具として知っていたものの、それが乾燥させたヒシの実の形状にならってつくられたものだったことに気づいた作者が、その発見を主題にして表現している。



写真11：「【ん】ん！これは 石じゃないよね 羊のフン」
 グループでの撮影中、羊を飼っている方に羊の写真などを撮らせてもらっている間に、作者は地面に落ちた羊のフンの方に着目している。普段、市街地で生活していれば、あまり羊のフンを見ることはないだろう。そのもの珍しさと、自分の小さな発見を切り取ろうとする思いによって撮影された写真に、作者の人柄をうかがえるような、少しとぼけた調子のユニークな読み文がつけられている。

これらの写真は、作者が自分の発見を他者に伝える手段として表現されており、もちろん美的価値判断も介在しているが、かならずしもそれのみを重視して撮影されたものではない。これを、参加者が表現した内容の第一の特徴として挙げたい。

次に、2番目に枚数の多かった「b：美しい景色・美しいもの」に分類された作品についても、何点か紹介する(写真12～15)。

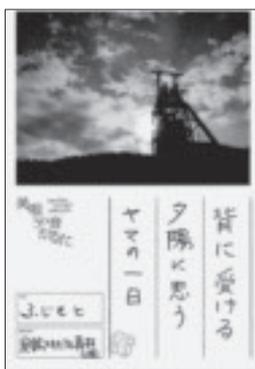


写真12: 「【せ】背に受ける 夕陽に思う ヤマの一日」
炭鉱メモリアル森林公園内に残された立坑櫓(たてこうやぐら)が、夕陽を受けてシルエットを浮かび上がらせている写真。ドラマチックで美しい写真だが、一時期は美唄の産業を支えた炭鉱の遺物に対して作者が感じた感傷的な気分を、写真と文章から読み取ることができる。

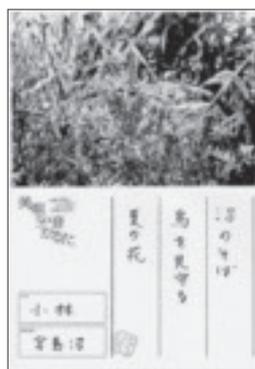


写真13: 「【ぬ】沼のそば 鳥を見守る 夏の花」
美唄の観光名所でもある宮島沼のそばで撮影された、小さな紫色の花の写真を使用。宮島沼といえばマガンが渡ってきた時期の沼の風景写真が代表的なイメージだが、この作品は風景ではなく、足元の花に注意が向けられている。作者の優しい目線に共感できる作品になっている。



写真14: 「【み】水面から 夏の宝石 すくいあげ」
ワークショップ当日に開催中だった市内のイベントで、ミニトマトすくいに挑戦した参加者の作品。水中からすくいあげられたばかりのミニトマトの表面の艶やかな質感と、トマトひとつひとつが微妙に異なる色彩であるためにできるモザイク状の配色の美しさを、作者は「夏の宝石」と表現している。



写真15: 「【ゆ】ゆっくりと 時間が進む 線路の雲」
峰延駅の近くで撮影された写真を使用。鉄道の架線と支柱(トラスビーム)、その周辺の木々が、逆光の美しいシルエットを描いている。被写体からは、電気エネルギーによるスピードや動力を連想させられるが、読み文は雲の動きのゆったりとした様子をあらわしており、対比的である。

これらの作品は、風景やものの美しさを主題として表現されている。しかし、その美しさは、いつこの場所に行ってもあるものというよりも、たまたま作者がこのときこの場所にいたからこそ切り取ることができたものである。そうした意味で、いわゆる観光ガイドなどに載るような名所の写真の美しさとは少々趣が異なる。つまり、少し格好をつけたい方をするなら、「いま・ここ」性が尊重された表現が「美唄50音かるた」における成果物の第二の特徴だといっても良いのではないだろうか。

2-3. イメージの集合としての「かるた」

さて、前項では個々の作品について見てきた。そのほかにもうひとつ、この「美唄50音かるた」全体にわたる特徴がある。それは、ワークショップでかるたを制作するという方法に関する。

マス・メディアに表象されるような完成度の高い、象徴的なイメージに対して、このワークショップで参加者がおこなった表現は、荒削りで、美的価値以外のところに重心が置かれているものも多く、個人的な経験にもとづくイメージである。仮にここでは、前者を「大きなイメージ」、後者を「小さなイメージ」と呼ぶことにしよう。「大きなイメージ」は、過剰に単純化され類型化されたステレオタイプと呼ばれることもあるが、観光ガイドや雑誌などで地域について紹介する際には、受け手がイメージを理解しやすく、他とすぐに区別できるという強さも持つ。一方の「小さなイメージ」は、さまざまな表現にあふれ、多様であり、ひとつひとつの表現力は弱いかもしれない。ただし、たとえばインターネット上にあふれかえる雑多でとりとめのないイメージと今回のかるたとが違うのは、総体としてひとつの方向性を描いているという点である。その方向性とは、今回の実践の場合は「日常の目線で美唄の魅力を発見し、共有する」というフレームによるものだ。「美唄50音かるた」の第三の特徴は、

この点にある。

2-4. 地域におけるデザイン

第2節で確認してきた「美唄50音かるた」の特徴をまとめると、次のようになる。(1)美的価値よりも、参加者が自分の発見を伝えるための表現が中心になっており、(2)参加者が、このとき・この場所にいたことによって成立するものであり、(3)〈小さなイメージ〉の集合によって美唄の魅力が描かれている。これらの3つの特徴によって、「美唄50音かるた」は、他の地域かるたと形式的には似ていても、内容的にまったく異なる独自のものになったといえるのではないだろうか。

地域におけるデザインという視点からこの実践をふり返ると、地域のブランディングといったデザインの手法は、〈大きなイメージ〉を創出するデザインだということができるのに対して、「美唄50音かるた」の実践は、〈小さなイメージ〉の集合をつくりだすしくみとして機能したといえる。しかも、本実践では、美的価値判断を重視せず、「いま・ここ」性に依拠しているという点で、従来のデザインの手法からは逸脱しているように見える。しかしこの比較は、どちらかに優劣をつけるためのものではない。地域ブランディングという手法は、地域の〈大きなイメージ〉をデザインし、核となるアイデンティティを持った視覚的な独自性、同一性を持たせることで、行政や産業と、市民・消費者との間に共通認識を生み出す大きな力を持っている。ただし、〈大きなイメージ〉は力強い反面、他にもあるかもしれないこまごまとした地域の魅力を切り捨てることで成立するという構造から逃れることができない。そこで、本研究でおこなった実践のような〈小さなイメージ〉の収集を並走させることが必要になるのである。そうすることで、地域におけるデザインをより豊かなものにできるのではないかというのが筆者の考えであり、この項でおこなった分析によれば、その意図は達成できたのではないかといいても良いようである。

3. 改善点と今後の展望

3-1. 改善点

一連の実践を終えて、参加者の感想も好意的であり、魅力と特徴のある美唄のかるたが完成したのだが、改善点もなかったわけではない。この項では、まずそれらを確認する。

①ワークショップの運営方法

ワークショップのプログラムについては事前に慎重に検討を重ねたが、それでも不十分な点がいくつかある。ひとつは、2日間のプログラムでは十分に市内をまわりきれないこと。今回は南部エリア(進徳、光珠内、峰延方面)などを十分にまわることができなかった。参加者が訪れなかった場所にも魅力はあるはずだが、すべてをすくい上げることはできなかった。ただし、この問題は限りなくワークショップの参加者を増やし、時間を長くしても原理的には解消されないため、どこでどのように折り合いをつけるか、または異なる方法を検討するべきである。ふたつめは、開催時期が8月だったため写真がすべて夏らしいものになったという点である。その他の季節にも継続的に実施していくしくみづくりをできれば、より地域かるたとしての完成度があがると考えられる。

②参加者の協働による表現の弱点

参加者は表現のプロではないため、不用意に選んだ言葉が、後から見るとネガティブな表現に見える可能性もあった。その場を共有している参加者やファシリテーターの間ではまったく悪気のない表現に感じられても、その後完成したかるただけを公開した場合に異なる受け止められ方をすることに、実践中には気づくことができなかった。ただし、ワークショップという手法でかるたを制作する以上、こうした温度差ができることを防ぐのは難しいともいえる。

③技術的な能力差

カメラに関する知識や、高価なカメラを持っているかどうかで、できあがったかるた台紙の見映えに差が出たことは否定できない。ワークショップの最後に投票で採用作品を決めるため、写真の撮り方に関する解説などを冒頭に少し加えた方が良かったのかもしれない。

3-2. 今後の展望とまとめ

前項に挙げた改善点は、こうしたワークショップを継続して実践したり、プログラムを一部修正したりすることによって解消できる範囲のものである。したがって、このしくみを持続的に循環させていく方法を検討することを、今後の課題としたい。本実践の中では、写真を貼ったり文章を書いたりといった手作業によってかるたを制作したが、こうしたしくみをウェブ上で展開したり、工学的なシステムと組み合わせて実践したりという方法も考えられる。

また、今回の一連の実践は、地域におけるメディア・デザイン実践として企画・実行したものであったが、こうした試みがデザインの文脈の中にどのように位置づけることができるのかという問題に対する分析および評価は残念ながら不完全である。さらに、ワークショップやメディア実践は他にも多く試みられており、先行研究による知見も蓄積されているのだが、そうした人文的知見との接続に関しても本稿では言及できなかった。個々の実践が単発的なものに終わらないようにするための循環的なしくみづくりの検討と同時に、今後の課題として取り組む必要があると考えている。

謝辞

本研究は、美唄市との連携事業「美唄サテライト・キャンパス」の一環として実現したものです。美唄サテライト・キャンパス運営協議会の方々には、企画段階から当日の運営までの数々の助言や準備など、大きなお力添えをいただき実践をおこなうことができました。また、ワークショップとかるた大会に参加してくださった方々にも感謝します。どうもありがとうございました。

注釈

- ¹ 「美唄サテライト・キャンパス」は、美唄市と札幌市内の大学が連携に関する協定を取り結んで2012年度から展開している事業の名称。目的は、美唄市の地域活性化や人材の育成、学術の振興である。2012年度は札幌国際大学、札幌大学経営学部・大学院経営学研究科、札幌大谷大学の3大学が協定に参加している。本稿で報告する「美唄50音かるた」の実践は、この美唄サテライト・キャンパス事業の一環として実施されたものである。
- ² 郷土かるたとも呼ばれる。1947年に発行された群馬県の「上毛かるた」が有名だが、北海道内でも「釧路ふるさとカルタ」「十勝ふるさとカルタ」「小樽郷土かるた」「北海道地名かるた」など多数が発行されている。
- ³ 名称は「美唄50音かるた」だが、現代仮名遣いで使用されない「や」行と「わ」行の「い」段と「え」段の札をつくらなかったため、札の枚数は全部で46点となった。